



還らざるもの蔵しるる薄原
汝はいま天馬の旅か銀河の夜
蓮の実の飛んではるかな香格里拉
藪枯らし戦を止めるとは言へず
明日といふ遠き未来や男郎花
しなやかな貂の跳躍風は秋
凌霄盛り身をもち崩しゆく予感
玉響の身を置く秋の離れかな
ずり山と指差す山のしげりかな
蟬弔ふ蟻の行列続きをり
八月を忘れぬやうに麦ご飯
西行を思へばかたへに秋の水
けらつつき愛渴すればかたくなよ

*

良夜なり行先表示無き電車
出征の祖父より母へ踊り下駄

奥山源丘
古畑恒雄
遠藤靖子
満田光生
宮地良彦
塩原英子
渡辺真帆
伊藤木公
柴田郁子
島田裕子
遠藤君子
小伊藤美保子
志摩晴樹

小口洋子
宮岡光子

秋天といふ清らかなやつれ方
海桐の実一燈もなき海暮るる
馬の臀ひよいと乗りたるすいっちよん
南瓜に指さすを齋み安曇人
けむり茸踏めばたちまち少女の日
新涼やさびしさとして在る身体
土へ魂入れる如くに大根蒔く
虫の音が星の数だけ増えにけり
墓沼にかけをる呪文かな
秋立つや草一本を見ても母

*

父は鮎起こす役目の火振りかな
雁渡しカロートへ母帰しけり
亡国の金貨のごとき秋刀魚かな
屋上に青き檸檬の木陰かな
枝豆を金庫の中へ隠したい

江幸代
安藤潤子
三品吏紀
山岸俊一
久田恭子

古屋洸
西川五月
名取朋子
大野今朝子
千葉任子
北村宣枝
佐々木重昭
島田邦彦
久根美和子
宮澤和子

岳・見えたるひかり 十一月

(483)

宮坂 静生

——同人集・岳集・青雲集から

はじめに。新入会員が増えている。したがって青雲集の投句者が増えるが、すでに他の俳誌で十分に力を付けている方はやはり一年を待たないで岳集へ行って貰うように考えたい。岳集も活気が出ている。青雲集は初めて投句を始める誌友の欄にしたい。頁が取れないので、句をたくさん掲げたいが短評になってしまい苦慮するところである。

平和とは束の間の休戦か——八月を忘れない

八月を忘れぬやうに麦ご飯 遠藤 君子

素朴・率直がいい。たくさん犠牲により敗戦日を迎えた。その八月を生きているかぎり忘れないために今も「麦ご飯」。暮らしに心棒がある。なにを心棒にするか。そこに思想信条が生まれる。やさしい生き方が共感を呼ぶ。

還らざるもの蔵しゐる薄原 奥山 源丘

晩秋の薄原には人の世の興亡を含め自然界の「還らざるもの」がひそむ。薄はぼうぼうと枯れ、絮を飛ばし無言。ことばを超えた実体を見せて、無限のことばを放っている。

しなやかな貂の跳躍風は秋 塩原 英子

人よりも生き物の貂にこそ秋がきた。これが自然か。

玉響の身を置く秋の離れかな 伊藤 木公

「玉響」とはわずかの意。忙しい御仁か。素晴らしい離れ。秋は一段と「玉響」のとき。高山のリーダーの一人。住斗南子門下には優秀な人材が多い。木公さんの奮起を願う。

ずり山と指差す山のしげりかな 柴田 郁子

いわき市在住。常磐炭鉱の捨石（ずり）の堆積した山。そこに木が茂り山に変貌しても生産性があるわけではない。かつての繁栄の陰に見捨てられてゆく現実を直視した秀句。

今月の秀句

凌霄盛り身をもち崩しゆく予感 渡辺 真帆

身を持ち崩したい、破壊好きという途方もない思いは恵まれた者ほど抱くもの。そこから古来芸術は誕生した。貞淑ほど破壊好き。真夏、のうぜんが朱の花をぼたぼた落す。爛熟の極み。なにかの予感を「身をもち崩しゆく」と捉えた表現力に感心した。少しく変わる予感であろっ。

汝はいま天馬の旅か銀河の夜 古畑 恒雄

亡き妻への思いやりは自分自身への励みでもある。銀河系もこの世とともに生きる宇宙。そう思うことで他界は身近になろう。他界での生き方を想像するのは楽しいではないか。

蓮の実の飛んではるかな香格里拉 遠藤 靖子

シャングリラは理想郷。イギリスの作家ジェームズ・ヒルトンの『失われた地平線』から。靖子さんは極楽浄土を連想したものか。着想は古風ながら、表現が救い。

藪枯らし戦を止めるとは言へず 満田 光生

覇を競う世界の紛糾は晩秋の藪枯らし状態でありながら、なぜ「戦を止める」といえないのか。喰うか喰われるかは今こそ戦国時代。人類は滅亡に向かいつつあるのではないか。

明日といふ遠き未来や男郎花 宮地 良彦

女郎花ではなく男郎花を取り合わせた寓意。戦がない平和を「未来」の語にこめる。遠くても未来を信じたい意。

蟬帛ふ蟻の行列続きをり 島田 裕子

死蟬を担う蟻の列への愛情表現に感心した。

西行を思へばかたへに秋の水 小伊藤美保子

西行は秋水に身を映して水のころを探った歌人。通り一遍の「もののあはれ」の句ではない。真がある。

けらつつき愛渴すればかたくなよ 志摩 晴樹

啄木鳥の声を聞きながら、三島由紀夫の小説の題名ではないが、かたくなとは愛情の枯渇なんだと世相への内省を吐露。親が子をかたくなに苛め、殺す世の愛とはなにか。

* *

愛情とはなにか——草一本を見ても母

秋立つや草一本を見ても母 宮澤 和子

思いが深い秋。母への思いは無限。無限とは身近なものがみんな母に見えること。草一本さえも母に見える。亡き母よ。

出征の祖父より母へ踊り下駄 宮岡 光子

若き母にとり舅に当たる祖父。亡き後よろしくとの愛情に

胸が熱くなる。明るい思いやりが最高の人柄を思わせる。佳句。

秋天といふ清らかなやつれ方 古屋 洸

秋空に秘められた「やつれ方」に気付いた着想に感心した。冬を間近に唳々たる秋空の薄い皮の背後には荒涼たる季節が控えている。人も同じと、着想はそこにあったものか。

海桐の実一燈もなき海暮るる 西川 五月

日本海詠であらうか。海辺から海原への大景が、人が抱え

今月の秀句

良夜なり行先表示無き電車 小口 洋子

スマホから始まりAIの世は、機器に查い私にとり、「行先表示無き電車」に乗せられている気がする。あれよあれよという間に電車は超スピードで走り出している。未来が明るいという「良夜」気分の「頭のいい人物」がいることが恐ろしい。戦争と同じくらいに先行きが見えない。もう庶民の時代は終わってしまったのか。地球人なのか火星人なのか異星人なのかわからない人種が増えている。作者の着想とは違うかもしれないが、こんな読みも出来るようだ。同人集の「新しき桃の実に棘あるやうな」にも感心した。

虫の音が星の数だけ増えにけり 島田 邦彦

深秋。天も地も大きな共鳴体となる。交響楽の季節。

墓沼にかけをる呪文かな 久根美和子

土俗の世界を捉え、秀逸。墓の声が密教の呪文とは見事。岳集推薦候補作を掲げる。

虫の夜やチェロ横たはる舞台裏 水谷 亮一
炎天に吊るされてゐる不発弾 田中 優子
ことさらに大きく見ゆる秋の蛇 西牧千恵子
田の隅のしよぼくれ案山子祖父かとも 小野 文雄
そよぐこと露波乗りの形となり 小泉 千波
少年に信濃の時間稲の花 五味 真穂

今月の秀句

雁渡しカロートへ母帰しけり 安藤 潤子

雁が渡る初秋に吹く北風。青北風。夏の間、身近に置いていた母の骨を秋風に促されるように家墓の納骨室に収めたもの。一区切りの思いが深い。雁渡しの取り合せが土俗の風習を汲み上げ、無理がない。自然体である。

て生きなければならぬ宿命をどことなく感じさせる。そんな深読みができる句である。

馬の髻ひよいと乗りたるすいつちよん 名取 朋子

ユーモア横溢。馬も馬追もよき友達。今もこんな鄙があるとは救い。富士見町在住。

南瓜に指さすを齋み安曇人 大野今朝子

指さすと実が落ちる。こんな俗言を思い出す。鄙の地べたには今も崇りと呪いが生きている。都会にも都会の崇りと呪いが。

けむり茸踏めばたちまち少女の日 千葉 任子

魔術のごとし。学校の帰りにそんな遊びがあったつけ。

新涼やさびしさとして在る身体 北村 宣枝

豊満、瘦身を問わず、身体がさびしいとはものを考えるすべての出発点であろう。楽しい、寂しい、哀しい、すべて身体を感じがもたくなって生まれる。難しいメルロ・ポンティの心理学も究極はそこから。新涼を捉えたセンスは抜群。

土へ魂入れる如くに大根蒔く 佐々木重昭

土への愛情が深い。一粒の大根の種が魂とは、なるほど。「土握り土と語りて秋菜蒔く」（上條忠昭）にも共感した。

青雲集 ― つねに新しく、どこまで自分が表現できるか

父は鮎起こす役目の火振りかな 江 幸代

岐阜の長良川の鮎の火振り詠。火を振り鮎を起こす。この原始的な力強い呪術めいた行為に感動する。鮎は身に付いた習性を改めることなどしない。ひとつひとつに発見が潜む。

亡国の金貨のごとき秋刀魚かな 三品 吏紀

秋には秋刀魚を口にしたい。日本中の者が秋刀魚、秋刀魚と秋刀魚に群がる。高ずれば秋刀魚を手に入れるため金に糸目をつけない。秋刀魚水揚げの地に近く住む作者ならではの抜群の比喩に感心した。

屋上に青き檸檬の木陰かな 山岸 俊一

都会暮しに屋上庭園。夏には青い檸檬が実る。北原白秋ではないが、この抒情は爽やか。どこかに建築家の芸が感じられ、初登場の作者の秀句。

枝豆を金庫の中へ隠したい 久田 恭子

二十代の作者。枝豆好きな子がいる。隠す場が金庫とは、これは大層な枝豆。意外な発想に拍手。

推敲・添削 ●●●●●●●●●● 宮坂 静生

○このように添削し推敲する

主になることを生かし、こまごましたことは省略する

原句 拗ねごろ添えて葉に文字摺草 市川 静子

添削 拗ねごろ文字摺草にありにけり

「文字摺草」は振花のこと。なぜ葉に作り手の拗ねごろを添えるのか。そこがわかりにくい。振花に拗ねごろがあることを指摘するだけでも独自の見方がわかる。

原句 帰燕なり空巢空家里麓 大浦フサ子

添削 帰燕なり空巢に空家ばかりなり

「里麓」はいらない。燕が南へ帰る頃、あたりの巢は空っぽ、家は空家ばかりとは、現代の過疎地を捉えている。

原句 木曾節の無い盆踊り背を向ける 佐藤 悦雄

添削 木曾節のなき盆踊興ざめに

「背を向ける」は表現が激しすぎるので、気持を抑える。

原句 茶毘の煙自然一如に鰯雲 赤澤 久喜

添削 茶毘の煙消えてしまえり鰯雲

「自然一如」はむずかしい。全体のバランスを考え優しく。

原句 堂々と闇に優々ふくろうか 齋藤 元紀

添削 堂々と闇にふくろう生きている

「優々」は優しい意か。そこは省いて「生きている」に。

原句 古墳傍に干衣白し茂 藤森 岳仁

添削 草茂る古墳の傍に白衣干し

「茂」は「草茂る」にした。「干衣白し」も工夫した。

原句 梅杏の核糧にせよとや防空壕 常田 亥子

添削 梅杏の核を糧にと防空壕

戦時中を思い出す。梅や杏のアンニンを含む核を防空壕の屋根に干して食べた記憶が蘇った。不思議な句。

原句 ざらざらの朝霧分けて速歩にて 矢部 正之

添削 ざらざらの朝霧分ける速歩なり

着眼が抜群に良くなっている。表現の細部を整える工夫を。

原句 日の落ちて宵のつかのま秋の声 洞口 貢

添削 日が落ちて宵のつかのま秋の聲

着想が素晴らしい。若々しさが持つ強引さは魅力である。

原句 蕎麦の花久しく母の夢を見づ 黒岩 房子

添削 蕎麦の花久しく母の夢を見ず

「見づ」は打ち消しにはならない。「見ず」。

○気になる表現——類句がある

原句 尉鷄そこ叩くなよ父眠る

例句 粟の穂のこゝを叩くなこの墓を 正岡 子規

「父の墓」を詠んだ子規の句が知られている。

原句 巻尺の戻る早さや夕立来る

例句 巻尺のもどり強しよ葉鶏頭 中西 夕紀

原句 甲虫に蟻群がりて引いてゆく

例句をあげないが、この着想は多い。